

旅する「原爆の凶」と反原発運動との出会い

——丸木夫妻とフランス、札幌、泊原発、そして電気料金不払い——

東村 岳 史

1. はじめに

東日本大震災によって引き起こされた東京電力福島第一原発事故後、核エネルギーの軍事利用（核兵器）と商業利用（本稿では原子力（核）発電に限定）が分離されて議論されてきた状態を批判的にとらえ、両者を結びつけて論じる研究や報道が増加している。本稿は、近年のそのような動向につながる一つの試みである。

さかのぼれば、原爆と原発を同時に問うという問題意識は、原水爆禁止日本国民会議の関係者の間では、比較的初期（一九六〇年代末）から取り組まれていた。その代表的著作として、池山重朗『原爆・原発』をあげることができる（一九七八年刊行、二〇一二年再刊）。また七〇年代後半以降原子力資料情報室の代表として活躍した高木仁三郎は、「いまの「反核」運動には、「反原発」の意識が全くかかっていると思います」^①と、それまで原発に積極的に関わってこなかった日本の核兵器廃絶運動を批判し、反原発^②運

動から反原爆運動への連繫を模索した。

ただ、原爆と原発は同根であるから「反核」とは両者を含むべきものであるという主張は、「理論（理念）的正しさ」を基盤にする言明ではあっても、実際にそれをどのように追究できるかという実践的問いに具体的な答えを提示するのは容易ではない。運動する側から見れば、反原爆も反原発もそれぞれが個別に戦わざるをえない局面が多かったといえよう。それだけで手いっぱいだからである。たとえば、一地域の原発建設反対運動に関わっている人に対して、同時に核兵器廃絶運動にも取り組めというのは過大な要求であるかもしれない。そう現状を認識すれば、反原爆運動と反原発運動はそれぞれ独自のコミュニティを形成しており、両者が重なるのはその一部ということもいえる。そうであるならば、反原爆と反原発の両方を問うことは、両方を同時にあるいは同じ比重で扱うという形態に限定されることなく、両者を行き来したり橋渡ししたりする可能性として考えてみてよいだろう。

また、前述の高木仁三郎は「私たちの反原発運動は、これまで

反核の運動のなかに、反原発というスローガンを加えようとする
ことへのみ、努力を傾けすぎてきたように思う」と一九八二年の
時点で述べ、「草の根」は手段ではない。むしろそれは、運動の
原理であり、核を生み出した巨大志向や権力志向と根本において
対決する思想であり、いわば「核のない社会」の原理そのものは
「草の根」でもなく、望ましい社会のあり方を原
理に据えながら生活の場において実践する「草の根」が必要であ
ると考えたのである。

本稿では、反原発と反原発の二つの陣営をつなぐ「草の根」の
具体例として、「原爆の凶」の作者として知られる丸木位里・丸
木俊夫妻の言動、中でも丸木俊の方に着目する⁽⁴⁾。北海道を研究
対象としてきた私は、泊原発建設反対運動の過程を追う中で、た
またまそこに丸木俊が関与する時期があることを知り、また俊が
運動に積極的に関わる前に札幌で開催された「原爆の凶」展と結
びつけることができるのではないかと考えた。以下では二つの反
原発から反原発への歩みを重ね合わせてみたい。一つは、丸木位
里・丸木俊夫妻の反原発への取り組みである。もう一つは、一九
八〇年代初頭に札幌で「原爆の凶」展を開催した人たちのその後
である。二つの歩みが今日どのような意義を持った取り組みとし
て振り返ることができるのか、最後に考察を少しばかり展開する。

2. 丸木夫妻と反原発

丸木夫妻は反原発運動とどのように出会ったのであろうか。丸

木たちがいつごろから原発に関心を持っていたのかは定かではな
いが、直接の出会いは一九七八年の渡仏である。『朝日新聞』一
九七八年四月七日「『原爆の凶』こんどは仏へ」はその事情を次
のように報じている。丸木美術館監事の西尾昇が一九七六年末に
約一カ月間、スイスやフランスで有機農業、軍演習場拡大反対運
動、反原発運動に関わっている人たちと交流を持ったのがきつか
けであった⁽⁵⁾。翌年フランスから原水禁大会に参加するため来日
した二人が丸木美術館を訪問、「原爆の凶」に感銘を受け、絵と
夫妻、西尾らのフランス訪問が実現することになった。西尾は招
聘する側の意図をこう説明したという。「フランスの住民運動で
は、原発による環境汚染が問題にされているばかりではなく、核
の平和利用と軍事的利用が一体としてとらえられている。平和
的利用とされる原発がプルトニウムを生み、それが原発の材料に
なるから、原発の建設は核兵器の拡散につながるというわけだ。
そこで、広島の惨状を広く住民に知らせたいと考えているよう
だ」。このフランス行きが決まって丸木夫妻がインタビューを受
けた折、記者の「反原発運動との結びつきをどう思いますか」と
いう質問に対して、位里は「全く予想もしていなかったが…。住
民運動に役立つなんて、大変いいことだ。見てくれる人があれば、
どこへでも持ってゆきたい」と答えている。この発言をそのまま
受け取るならば、夫妻は反原発運動との連携を最初から意識して
いたとは言えないようである。

一行は五月から七月にかけてフランスをほぼ一周する形で巡回
キャラバンを行なった⁽⁶⁾。俊の言葉では、五〇年代に「原爆の凶」
がヨーロッパを巡回した際には美術展覧会という「少し形式張っ

たものだった」のに対して、今回は草の根という「形式も全く違う」ということにも興味があった。彼らエコロジストは、原発も原爆と同じような災害を人間に与えているというわけで、私たちは意気投合したんです。それで三十三年前の「原爆の図」が、今日的な意味でお役に立てれば⁽⁷⁾という思いでフランスに向かった。夫妻は彼らを招いたエコロジストたちと交流し、質素な生活ぶりに感銘を受けた様子を記しているものの、帰国後夫妻が原発にどのように関わろうと考えていたのか、すぐには動きは見られない。その前に夫妻の画業は水俣に向かうことになる。位里によれば、フランス滞在中ある座談会の席で「原爆の話よりか、水俣の話：水銀公害の話聞かせろ」といわれたそうで、水俣病のことをよく知らなかった夫妻はその場ではお茶を濁していたものの、帰国後すぐに水俣へ向かった⁽⁸⁾。そして一九八〇年に「水俣の図」を完成させた後、八一年には「水俣・原発・三里塚」と題した絵を描いている。夫妻の絵の中に「原発」が主題として登場する最初である。水俣を介して原爆と原発がつながってくるのである。ただ、「水俣・原発・三里塚」というタイトルを目にした時、何かしつくりこないものを感じるのは、「水俣」「三里塚」というのが具体的な地名でありそこで起こっている事件を喚起するのに対して、「原発」はそうではない点である。八一年はスリーマイル島事故が起きた後であり、夫妻はその事故を知ってから「原発」を形象化するつもりになったのかもしれないが、具体的にどの地で（の）「原発」に関わるつもりなのか、この時点ではまだ考えていなかったのではないだろうか。

3. 札幌の「原爆の図」展

札幌で「原爆の図」展が開かれたのは、丸木夫妻が「水俣・原発・三里塚」を完成させたその翌年であった。開催実行委員会中心には、竹村泰子（札幌YWCA、後に国会議員）、西村茂樹（原水禁事務局長）、西村英樹（ノーム・ミニコミセンター）らがいた。竹村泰子は、開催は三つの流れが合流して実現したものであるという⁽⁹⁾。一つ目は、前年に丸木夫妻の制作の様子を描いたドキュメンタリー映画「水俣の図・物語」（土本典昭監督）を上映した人々など市民運動の流れで⁽¹⁰⁾、映画の上映実行委員会事務局長をつとめたのが西村英樹である。西村によれば、上映会には丸木俊も出席し、その際に俊が「水俣病はゆっくりやってくる原爆です。いま原爆が原発に、農薬に化けて私たちをねらっている」という言葉が耳に残り、「原爆の図」を紹介したくなったのだという⁽¹¹⁾。二つ目は、札幌地区労ら労働者の流れ、三つ目は、核を否定し続けてきた札幌YWCAの流れである。竹村が所属する日本YWCAは、一九七〇年の総会でいち早く「核」否定の思想に立つ⁽¹²⁾を運動方針として打ち出し、広島訪問などの活動を続けていた。札幌での文脈をより大きな文脈に位置づけると、さらに二つの流れが影響していたといえるだろう。一つは、八〇年代初頭に欧米で活性化した反核運動である。欧州諸国にアメリカの新型戦域核ミサイルが配備されると欧州が直接戦場にされるといふ危機感から、空前の規模の反核デモが各地で行なわれた。日本にもその影響は及び、反核署名や文学者の反核声明などの運動につながっていった（ただし、高木仁三郎が指摘したように、日本の反核運動は

反核兵器で反原発には結びついていないものが多かった)。

もう一つは、教科書検定問題である。教科書の執筆者が偏向しているため検定を強化して「愛国心」を涵養する内容にしたいとする自民党と、それを批判する日教組や研究者が対立した。丸木夫妻の「原爆の凶」は「悲惨すぎる」との理由で小学校教科書では一律に掲載禁止の処分を受け、夫妻はこれに抗議した。皮肉なことに、削除処分がかえって「原爆の凶」への注目を高める効果をもたらした⁽¹³⁾。札幌のみならず、大阪、京都や長崎、熊本、名古屋などでも「原爆の凶」展が開催されることになる⁽¹⁴⁾。また八二年の日教組の広島教研集会では「原爆の凶」がポスターに用いられ、招待された俊は教科書から削除された「原爆の凶」をわざわざ使ってくれたことに感謝しつつ、原発の危険性についても言及した⁽¹⁵⁾。

札幌の「原爆の凶」展は三十一年ぶり(一九五一年)の原画展で、作品の痛みが激しく美術館からの持ち出しは不可とされていたのを夫妻の好意で「最後の原画移動展」として実施された⁽¹⁶⁾。それで、夫妻にとっても力の入った取り組みであったことがうかがえる。実行委員会事務局の柳原彰一郎によれば、展覧会に俊は次のようなメッセージを寄せたそうである。「恐しい戦争が終わった時、原子爆弾は姿を変えて、平和利用の看板をかけて現れました。エネルギーが足りない、安全だと叫びながら放射能の災害をふりまきつけています。この放射能(位里と俊が広島に入って苦しめられた残留放射能のこと：引用者補足)と同じなのです。／恐しい戦争が再び近づいてきました。／原子力発電所に蓄積されたプラトニウム(ママ)は再び原爆に姿を変えようとしています。日本

は強大な原爆保有国になろうとしているのです⁽¹⁷⁾。ここでは核戦争への危機感と、原発運転で蓄積されたプラトニウムを日本が原爆に転用するのではという危機感が表明されているのと同時に、「平和利用」の欺瞞にも批判が向けられている。俊のメッセージに続けて柳原は、「核」はまた、形を変えて私たちの身近に迫ってきている」とし、泊原発や幌延町の核廃棄物処理場、奥尻島の核再処理工場計画をあげている(これらについては後述する)。「核」の問題として、核兵器と核発電、核廃棄物処理の問題が連鎖するものとして、俊にも主催者たちにも認識されるようになっていた。七月の展覧会に先立って五月下旬に開かれた討論会「反核のおもいをよせて」には三十人あまりが参加、その中では原爆だけではなく原発や放射性物質の食品汚染なども議論の対象となった⁽¹⁸⁾。

展覧会は七月二〇日から二五日までの六日間で、入場者は約一万七千人と大きな賑わいをみせた。アンケート(感想文)の回収は六二〇〇枚になった⁽¹⁹⁾というから、観衆の熱心さがうかがえる。会期中、俊は二度にわたって観衆の前で講演し、二度とも「おもしろい友達」について言及している。原発でできた電気代は払いたくないと拒否したため電気を止められたという東京在住者である。その話を聞きつけたテレビ局に出演を依頼された友人は、持論を述べる機会を得た上に出演料までもらったそうである。そのエピソードを受けて俊は、「原発反対でもいろいろあるでしょう。反対反対ってデモするのもいいし、皆のところを原発あぶないのよって言って歩いてもいいしね。それから、電気代払わないというのでもいい方法ね。とうとうテレビに出られるんだから。(笑い)

そしておまけに世の中の仕組みが見えてきた」と述べた⁽²⁰⁾。ただ、この時点では「おもしろい友達」についての他人事(笑い事)であり、自分の覚悟としてまでは引き受けていなかったように読める。その後、自分が同じことを実行することになるとはこの時には予測していなかっただろう。

八二年の「原爆の凶」展から派生することを二点、ここで言及しておきたい。一つは、札幌での反戦・反核に関連した展覧会である。八二年に引き続き、八三年には「広島原爆資料巡回展」、八四年には「戦争を未来(こどもたち)に伝える絵画展」と題して、丸木夫妻の「沖繩戦の凶」と、夫妻と親交のあった中国の画家・周恩聡の「坑夫の凶」などを展示する催しが札幌で続けられた⁽²¹⁾。八五年から八七年にかけては関連の企画は確認できないが、八八年には「反原発」を初めてテーマとして掲げた「平和美術展」が開催されている⁽²²⁾。

もう一つは、「原爆の凶」展開催で中心的な役割を果たした人たちが、手を広げて核の問題に関わっていく動きも見られる。西村英樹は「ばななぼう」という有機農業や反核の問題に関心を持つ市民運動のイベントに参加した際、核再処理工場建設計画が持ち上がったいた鹿児島県徳之島を訪れ、西村自身は幌延の廃棄物処理施設計画について報告した⁽²³⁾。また後述するように竹村泰子や柳原彰一郎は泊原発反対運動に関わっていく。

4. 丸木俊と泊原発阻止行動

丸木俊と泊原発の直接の結びつきについて述べる前に、泊原発

や北海道の他の核関連施設の動向について説明しておこう。

泊原発建設の話が持ち上がったのは一九六〇年代後半のことである。当初は岩内郡漁協を中心に反対の意思が住民の間には強かったが、推進派の切り崩しに会い、岩内郡漁協も八一年に(条件付き)建設賛成に転じた時点で、原発建設はほぼ既定路線と見られていた。その後社会党の横路孝弘が八三年の道知事選挙で当選したことで既定路線が見直されるのではという期待も反対派にはあったようだが(後述する道民投票条例制定要求運動にもそれは反映されているだろう)、横路は行政の一貫性を理由に泊原発建設を容認する姿勢を崩さなかった。泊原発建設は八四年から始まり、八八年に燃料を搬入し運転に向けて準備されることになっていった。

泊原発建設・運転阻止が難しくなったにもかかわらず、北海道において「反核」の機運が保たれていたのは、皮肉にも幌延の核廃棄物処分場施設計画によるところが大きい。他の核関連施設計画としては、奥尻島の核再処理工場、浜益村や大成町の原発などもあがっていたがやがて消滅したのに対して、幌延の計画はなかなか頓挫しなかった。当初低レベルの廃棄物処理場計画として持ち出された案は、実は高レベル廃棄物をねらったものだということが発覚、一方的に受け入れを表明した町長に対して農民や漁民を中心とした反対の意見が相次いで出された。泊原発に対しては容認の姿勢だった横路知事も、幌延の処分場計画に対しては一貫して反対を表明し、自民党が多数派を占め計画推進を目論む道議会としばしば対立した。膠着状態に業を煮やした動燃が、地元の理解を得られぬまま抜き打ちでボーリング調査を強行したりした

せいもあつて反発は強く、動燃の計画を阻止しようという機運は継続されていた。そして、核兵器反対運動の場で「反幌延」が主張されるようにもなった。『北海道新聞』一九八五年一〇月二八日「反幌延」を前面に／札幌でも反核・平和集会」によると、「いまこそ、反核、軍縮、平和だ！日本の政治をかえる10・27集会」では、「反核の立場から、自民党が進めようとしている留萌管内幌延町への高レベル放射性廃棄物施設の誘致にも反対していこう」と訴えられたとのことである（ただここでは泊原発は言及されていない）。

『北海道新聞』一九八七年四月二一日「チェルノブイリ 事故から一年 反原発派が集会」によると、事故一周年にあたる四月二六日に企画されていた「原発とめよう！札幌集会」の中心になったのは竹村泰子らであった。ただ、『北海道新聞』一九八七年七月二四日「盛り上がりらぬ反対運動／知事の容認姿勢影響」にあるように、「時計の針を逆戻りさせることはできない」という知事の姿勢のため、チェルノブイリ事故直後やその翌年になつても、泊原発阻止の運動は盛り上がりを欠いたものになつていた。

丸木俊が反原発に向けて行動を起こすのはこのような時期であった。

俊が原発の即時閉鎖を求め抗議の署名を呼びかける文書を丸木美術館ニュースに掲載したのは、チェルノブイリ原発事故直後、一九八六年六月のことである。チェルノブイリ事故と並んで俊の気持ちを奮い立たせたのは、原子炉等規制法の改正（改悪）であった。同法の改正は、低レベルの核のゴミの処分を廃棄業者に負わせるという内容で、社会党や共産党の反対を押し切つて政府は

強行採決した。俊は何人かの国会議員に対して要請行動を行なつている⁽²⁴⁾。直接言及されてはいないが、俊の念頭には、幌延の核廃棄物処分場計画も浮かんでいたのではなからうか。それを裏付けるかのように、翌号のニュースには、柳原彰一郎の「北海道幌延より」という報告が掲載されている⁽²⁵⁾。

そして翌八七年、俊は「拜啓 北海道知事さま」と題して、横路に泊原発推進見直しを求め手紙を送った。「原爆の放射能と原発の放射能は同じものなのであります」という観点から、幌延の計画に対しては反対を表明している横路の見識に感謝しつつ、「幌延の原発廃棄物投棄に反対して、泊原発の灰をどこに捨てたらよいとお考えなのでしょうか」と問いかけた。これに対して横路は返信し、「この原発は前知事が承認（同意）したものであります。私の手による原発の新規増設は、避けたいと考えています」と述べた⁽²⁶⁾。つまり、横路は原発にせよ廃棄物処分場にせよ新規計画は認めないが、自分が知事に就任前に決定されたことについては介入しないという立場を崩さなかつたのである。

この手紙のやりとりの直後、八七年八月末から十日間、俊は北海道を訪れ、幌延や泊原発反対運動の関係者たちと交流⁽²⁷⁾、知事夫人とも面談した⁽²⁸⁾。泊原発の地元、岩内では「丸木俊さんを囲む会」が開催され、主催者の「岩波原発問題研究会」の予想を上回る八八名の参加者があつた⁽²⁹⁾。「丸木俊さんのお話の中で、八万人の署名を道議会に提出すれば原発は止まるかもしれない、という力強い発言に会場はびつくりする一幕も」あつたと主催者側の中心人物は述べている⁽³⁰⁾。「八万人」というのは道民投票条例請求に必要な数のこと⁽³¹⁾で、その後反対運動側の戦略の一つとし

て取り組まれることになる。埼玉に戻った俊は、今度は丸木美術館友の会員や各地の「原爆の凶」展開催団体に対して、泊原発運動阻止を訴えかけるよう「原爆の凶」絵はがきを横路知事に宛てて送るよう呼びかけた。美術館が会員などに送った五千枚のうち二百枚ほどが十一月上旬には道庁に届いたという⁽³²⁾。

翌八八年は、「ニューウエーブ」と呼ばれた反原発運動が盛り上がりを見せた。四国電力伊方原発出力調整実験反対運動は、別府の小原良子らが主導、従来の運動（「オールドウエーブ」）のあり方にとらわれない動員力を発揮した。高松市の四国電力本社前の行動（高松行動）に際して、俊は「男は肛門がないのか、恐ろしい糞（うんこ）のことをどうするのか」というメッセージを寄せたそうである⁽³³⁾。

「ニューウエーブ」の流れは泊原発反対運動にも波及した。俊は「とまりとまればみなとまる」という、当時運動のスローガンとしてしばしば使われていた一節をタイトルにした一文を美術館ニュースに載せ⁽³⁴⁾、あきらめない姿勢を見せた。泊原発への燃料が茨城県東海村の三菱原子燃料から搬送される七月一八日、それを阻止しようと集まった反対派の中に俊の姿もあった。この時俊は心臓にペースメーカーを入れた体を押して「燃料棒を泊に運ばないで下さい」と訴えた⁽³⁵⁾。その後八月二日から小原良子らの呼び掛けで「原発トマリ記念日」という集会在札幌で行われた時には、俊の姪・村上ひさ子ら丸木美術館関係者の何人かも参加した⁽³⁶⁾。九月には、位里と俊は講演と映画を組み合わせたチャリティー絵画展のため来道した。出品した作品は道民条例制定の署名活動資金にあてるため即売した。俊は「原爆から原発まで」と題

した講演で、「戦争中は原爆で大勢の人が死んだ。原発でも何千、何万という死者がいつ出るかわからない」と述べた⁽³⁷⁾。一〇月一七日の運転開始直前の一二日には、横路知事と北電社長に宛てて抗議の電報を送った。知事宛ての文面は「どうせ裏切られるなら、信じるんじゃないかった」といったものだったそうである⁽³⁸⁾。

しかし、丸木俊らの行動にもかかわらず、結局反対側は発電所の運転開始を阻止できなかった。同年一二月、百万人を超える署名（うち有効署名約九十万）を集めて道議会に提出された「泊原発一号機の営業運転に関する道民投票条例案」は二票差で否決された⁽³⁹⁾。運動側の戦術・戦略に対する内側からの批判や反省もある。八〇年代から九〇年代にかけての反原発運動の包括的な見直しは今後の課題であろう。ただ、本稿ではそこにはふれず、俊と位里のその後の行動に話を移すことにする。

5. 丸木美術館と電気料金不払い、太陽光発電

高齢で心臓にペースメーカーを入れていた俊が、泊原発阻止の直接行動の現場に体を運び続けるのは現実的ではなかった。また、北海道は俊の故郷とはいえず、画業と生活の拠点は長らく埼玉にあった。その後俊と位里がしたことは、足元で反原発に関わることであった。原発による電気料金の支払い拒否である。

最初の行動は八八年の夏であった。電気料金を銀行の自動振替から直接の手渡しに変えたいと俊は言い出し⁽⁴⁰⁾、その受け取りのため美術館を訪れた東電職員に対し、「私は反原発の立場です。料金は払いますが原発分をほかの発電分と分けてほしい」と主張

した。夫妻は原発稼働分の電気料を二四%と見積もり、その分の支払いを断ったのである。東電との話し合いは決裂し、東電側は九月に美術館と夫妻の自宅への送電を一晩止めたが、支払いがあったため供給を再開した⁽⁴¹⁾。その後再度の不払いのきつかけとなったのは、八九年一月福島第二原発での原子炉再循環ポンプ損傷事故である。この事故後、「事故の原因がはつきりしないうちに、柏崎原発への核燃料輸送を強行するのはおかしい」と夫妻は指摘し、原発稼働分は払わない旨くりかえし訴えたが東電は聞き入れず、五月になつて美術館への送電を停止した⁽⁴²⁾。これに対しては、俊の講演会を開いた「岩内原発問題研究会」などが東電に「抗議および要請文」を送るなど、激励が届いた⁽⁴³⁾。美術館は自家発電で開館し続けたが、場所によっては薄暗い箇所も出た⁽⁴⁴⁾。窮状の美術館を支えるため、埼玉大学の市川定夫らが中心となつて「丸木美術館・風と太陽のエネルギー市民キャンペーン」を八月に立ち上げ⁽⁴⁵⁾、寄せられた寄付金で九〇年八月から太陽光発電が開始された。ただし、これはその後故障してしまい、「残念ながら東電への不払いは停止せざるをえ」⁽⁴⁶⁾。なかつた。太陽光発電の復活が美術館ニュースで宣言されるのは、二〇一二年四月のことである。

丸木夫妻が反原発を主題にした二作「チェルノブイリ」「反原発」を描いたのは、東電からの送電停止の最中であつた。位里によれば、「実は大分前から原発は描こうと思つて新潟から能登まで行つて写生も随分描いてみたが、いい案がうかばずそのままになつてしまつていた」ところを、美術館理事長の石川保夫に勧められて从展（ひとひとてん）に出品するため取り組んだそうであ

る。「ひとつはチェルノブイリ爆発を描いて、もうひとつは日本の原発反対の様子を描いて何とか反原発の作品も、いま出来上がつてこのくらいやりにくい題材もなかつたがとにかく原発の作品を二つ仕上げる事が出来た」⁽⁴⁷⁾と位里は述懐している。

6. 反原発への足取りとその後

丸木夫妻の画業全体の中で、「(反)原発」という主題が占める比重はごく小さい。これは後年になつて取り組まれるようになったという時間的制約のみならず、「原発」が絵にしにくい題材だったためではないかと思われる。「原爆の凶」がそうであるように、夫妻の大作は被害の惨状を群像として具象的に描くことに特色がある。夫妻がフランスの反原発運動に出会つた一九七八年は、まだスリーマイル島事故も起こつておらず、原発の危険性自体は理解できてもそれを具象化するという作業は想像力だけでは難しい。また、八一年の絵が「水俣・原発・三里塚」で「原発」には地名がついていないのは、その後俊が取り組むことになる泊原発はまだ形もできていなかったせいではなからうか（俊が丸木美術館ニュースに泊原発の絵を載せるのは二八号（一九八八年七月一四日）で、この絵は原子炉建屋ドームの上に骸骨が浮遊するものになつてゐる）。また九〇年に描いた「反原発」は原発運動に反対する人たちの姿が中心のようである（ただ依然としてこの絵にも地名はついていないのではあるが）⁽⁴⁸⁾。位里が「このくらいやりにくい題材もなかつた」と書いていたのは、以上のような事情をさしていたのではなからうか。これを裏付けるように、俊は八九年の時点でご

う述べている。「原爆の絵を描きたいと思うんですけど、まだ日本で原爆の大災害が起きてないでしょう。災害が起きるのを待つてみたいで嫌ですけど、幸い小さな災害で目に見えないから絵にならないのです。いま現実にあるのは、被曝労働者だよ。それしたら被曝労働者を尋ねて（ママ）行って描いたりしなきゃいけないわけですけど…。原爆の時みたいなのに、自分もその場に入って、フラフラになりながら歩いたってという目にあってないから、なんとなくまだ手がついていない。どう描いていいかわからない。絵になりにくいんですね」⁽⁴⁹⁾。

だからといって、夫妻にとつて、とりわけ俊にとつて、反原発は優先順位の低いテーマだったわけではない。それどころか、晩年になってたどり着いたゆるぎない信念の一部をなしていたように思われる。夫妻の反原発の足取りをたどつてきて、私が何より興味深く思うのは、その歩みが「原爆の図」の旅する絵という特性に由来していることである。絵も夫妻も巡回しながら人々と出会い、そこで得たことを糧として次のテーマへと発展させていく。アメリカで南京大虐殺について教えられたことがきっかけで、それを主題として絵にしたように、フランスで反原発運動に出会い、そこで出会った人びとからたずねられたために水俣に赴く。それゆえに、水俣と原発を結びつけてとらえることも可能になった。

「水俣・原発・三里塚」を描いてから「チェルノブイリ」「反原発」を描くまでの間、夫妻は「沖縄戦の図」「足尾鉍毒の図」なども手掛けていた。そのため、夫妻の歩みは反原発へと直線的に向かったというよりは、水俣などを経由した曲線的な歩みである。また「水俣の図」が札幌の「原爆の図」展への導きの糸となった

ことも、出会いの回路として意義深い。

渡仏の折も、札幌展の折も、俊や位里はそれぞれ原発反対の思いを述べてはいるものの、その後自分たちが実行することになる電気料金不払いを見越していたように思えない。また、広島教研集会でも札幌展でも俊は反原発について言及しているものの、原爆に始まり南京大虐殺、農薬、水俣など、話はあちこちに飛び、脈絡だったものとはいいたくない。夫妻の行動も講話も最初から理論的に組み立てられたものではなく、悪く言えば行き当たりばつたりの歩みに見えるかもしれないが、偶然の出会いに支えられながらも行き着いた先（反原発）は必然とも思われる。最後に足元の丸木美術館における電気料金不払いという行為を通して、夫妻は反原発の実践者となった。運動における一時的な関与ではなく、生活に根差した取り組みである。「チェルノブイリ」「反原発」の二作が東電への不払い期間中に制作されているということは、夫妻の思想と画業が融合した地点がここであるともいえる。本稿は反原発運動を包括的にとらえることを目指してはいないので軽々に述べるべきではないかもしれないが、少なくとも表面的には短命に終わった反対運動に比べれば、夫妻の反原発への取り組みは腰が据わったもののように私には見える。

「原発」を主題とした絵の制作にもまして重要なのは、「原爆の図」と丸木夫妻の足取りそのものである。旅する絵と画家の歩みは、長らく反原爆の絵としてながめられてきた「原爆の図」を反原発の絵として見ることを可能にもした。二〇一二年一月に横浜で開かれた「脱原発世界会議」に「原爆の図」レプリカが展示されたのも、「原爆の図」が反（脱）原発の絵としても見られる

ようになった証拠であろう。これは福島第一原発事故という厄災後ではあるが、見る側の恣意的な解釈で絵の意味を変更しているのではなく、夫妻の歩みがそのような解釈を裏打ちしているのである。

また、八二年札幌の「原爆の凶」展は、そこに集った人たちにとつて、核や環境問題に継続して関わっていくきっかけや転機になったようにも思われる。もちろんもともと関連する問題意識を持った人たちが企画を立ち上げたことだろうが、その後各人が社会運動に関わっていく際のささやかな「遺産」にもなっているのではなからうか。俊以上に、北海道在住者にとつて泊原発に関わっていくのは当然であった。反対派は結局泊原発の運転開始を阻止できなかったのだが、それで反対運動が終わってしまったわけではない。柳原彰一郎は、その後泊原発三号機増設計画が浮上した際に、「いま一度、原発について考えよう」と呼びかけている⁽⁵⁰⁾。この一文の中で彼がかつて水俣に住んでいたことを明かしているのは、丸木夫妻と同様の水俣と原発の結びつきを示して興味深い。竹村泰子は、泊原発廃炉訴訟の原告の一人となり、第四回口頭弁論(二〇一二年一月一七日)の際、YWC Aの「核」否定の思想に立つ⁽⁵¹⁾や、森滝春子(森滝市郎の娘)の「反原爆と原発のふたつはつながっている。福島は広島の目を覚まさせたのです」という言葉を引きながら、廃炉への願いを語った⁽⁵¹⁾。二人とも運転開始後も運動に関わり続けようとしている。

前段で「遺産」という言葉を用いたのは、八二年の札幌「原爆の凶」展自体もまた、反原爆を想起しつつ反原発を志向する起点として回顧されているからである。福島第一原発事故が起きた二

〇一年八月、札幌で「原爆の凶」のパネル展が行われた。実行委員会共同代表は竹村泰子である⁽⁵²⁾。パネル展の主旨を説明した一文を参照すると⁽⁵³⁾、二十九年前の展覧会開催が「心打つ運動」(村上ひさ子)として記憶されていた様子がうかがえる。

ただ、たとえ八二年の札幌展が「心打つ運動」として関係者の間では記憶されていたとしても、二十九年前の一回きりのイベントが自動的に語り継がれるということはまずありえない。その意味では、福島原発事故は、皮肉にも(何度か本稿でくりかえした言葉だ)忘れられかけていた記憶を掘り起こしたことになった。掘り起こされた記憶が「心打つ運動」としての価値を継承されるかどうかは、今後によるだろう。本稿がその記憶継承のささやかな一助として読まれるのであれば幸いである。

注

- 1 高木仁三郎「反核と原発のこれから」『国民文化』二七四号、一九八二年九月。
- 2 チェルノブイリ原発事故後に使われるようになった「脱原発」とそれ以前から使われている「反原発」を区別する立場もあるが(吉岡斉「脱原発とは何だろうか」『現代思想』三九卷一四号、二〇一一年一〇月)、本稿では区別せず「反原発」で統一する。
- 3 高木仁三郎「反核運動としての反原発運動」吉川勇一ほか『反核の論理——欧米・第三世界・日本』柘植書房、一九八二年、八〇頁、七九頁。
- 4 丸木位里・俊と「原爆の凶」については、本誌の読者であればいまさら紹介するまでもない優れた研究が存在するが(小沢節子『原

爆の図」——描かれた（記憶）、語られた（絵画）』岩波書店、二〇〇二年、岡村幸宣『原爆の図 全国巡回——占領下、一〇〇万人が観た！』新宿書房、二〇一五年など）、管見では夫妻の反原発運動との関わりを論じた先行研究はない。

5 西尾昇「フランスとスイスの反原発住民運動」『技術と人間』六巻三号、一九七七年三月、西尾昇「ラアールグ再処理工場における労働者被曝」『技術と人間』六巻六号、一九七七年六月、西尾昇「ヨーロッパ住民運動巡礼行」『現代の眼』一八巻七号、一九七七年七月、西尾昇「フランスのエコロジー運動——交流を通して生活即闘争へ」反原発事典編集委員会編『反原発事典Ⅱ「反」原子力文明・篇』現代書館、一九七九年、など。

6 丸木位里・丸木俊・西尾昇「原爆の図」フランス・キャラバン『技術と人間』七巻一〇号、一九七八年一〇月。『埼玉新聞』連載「赤いトラック 白茶のトラック 「原爆の図」フランス巡回展」レポート」1518、一九七八年八月一〇日〜三十一日。

7 前掲丸木位里・丸木俊・西尾昇「原爆の図」フランス・キャラバン」四〇—一頁。

8 平松利昭編『閃きの芸術・流々人生——丸木位里・俊の遺言』樹芸書房、二〇〇三年、一六二頁、および丸木位里・丸木俊・澤地久枝「対談 語りつぐべきこと」じじばばのひとこと』『世界』五〇七号、一九八七年一月、二四五頁。なお、本橋成一『ふたりの画家——丸木位里・丸木俊の世界』晶文社、一九八七年、によると、ブルガリアで開かれた「第三回反ファシズムトリエンナーレ国際具象展」（一九七九年）に「三国同盟から三里塚まで」という作品を出展した際、俊は講演の中で原発反対の話をしたそうである。その

時のことをさして、位里が「そのころから原発反対なんだよ、この人は」（九〇頁）という口ぶりからは、位里よりは俊の方が反原発への強い思いを抱いていた様子がうかがえる。

9 「原爆の図」展・記録編集委員会『記録集・原爆の図展』一九八二年、二頁。

10 「映画・水俣の図物語」は道内十数カ所で上映が予定されていたそうで、問い合わせ先となっていたノーム・ミニコミセンターを中心に、一定のネットワークの広がりを感ぜさせる（「映画「水俣の図・物語」——7月道内十数所で上映」『北海公論』五巻七号、一九八一年。

11 『北海道新聞』一九八二年三月一六日「ひと'82 いまこそ反核丸木位里・俊夫妻の「原爆の図」展札幌開催に奔走する西村英樹さん」。

12 日本YWCA100年史編集委員会編『日本YWCA100年史 女性の自立をもとめて 1905—2005』日本キリスト教女子青年会、二〇〇五年、第9章。なお「核」否定の思想に立つ」を主導した関屋綾子は丸木美術館の理事を経て、館長を一九九〇年から二〇〇一年までつとめた。また竹村泰子も同美術館の評議員をつとめていた。

13 『埼玉新聞』一九八二年六月三日「原爆の図、静かなブーム／文部省削除指示で関心呼ぶ」。

14 大阪展については、丸木位里・俊「原爆の図」展実行委員会編『不戦のちかい——大阪・「原爆の図」展の記録』部落解放教育研究センター、一九八二年、参照。京都展については、丸木位里・丸木俊「原爆の図」をみる会『実をむすべ！夏の花——1984・夏・京

- 都「原爆の図」展・記録』、一九八五年、参照。長崎展については、服部康喜「加害の記憶・長崎の「原爆の図」展」『原爆文学研究』九号、二〇一〇年、参照。名古屋展については、丸木位里・丸木俊原爆の図をみる会『丸木位里・丸木俊原爆の図愛知展報告集』核兵器禁止・軍縮と平和をめざす愛知県センター、一九八七年、参照。
- 15 丸木俊「原爆の図」とともに」『教育評論』四一七号、一九八二年三月。
- 16 『毎日新聞』北海道版一九八二年七月二六日「原爆の図」展から何を引き継ぐ」（前掲「原爆の図」展・記録編集委員会『記録集・原爆の図展』所収）。
- 17 柳原彰一郎「いまなぜ「原爆の図」展なのか——着実な共鳴呼ぶ道内」『プレス北海道』二巻八号、一九八二年。
- 18 前掲「原爆の図」展・記録編集委員会『記録集・原爆の図展』、五二―七五頁。
- 19 同前、一一八頁。
- 20 同前、九六―七頁。
- 21 『原爆の図丸木美術館ニュース』特別号、一九八五年七月一〇日、『北海道新聞』一九八四年八月八日「歴史の痛み子供たちに／戦争を未来に伝える絵画展」。また丸木夫妻と周恩聡の親交については、菅原憲義・丸木俊序『遺言——丸木位里・丸木俊の五十年』青木書店、一九九六年、参照。丸木俊自身、八四年に周恩聡の「坑夫の図」が展示されたことについて、「今度のは日本軍が悪いことした絵だから、どうかなって思っていたけど」と、日本側の加害の様子を示した絵を展示することが勇気のある企画だったことを評価している（「四季対談122 戦争なんて起こしちゃダメ」『ダン』一二巻九号、一九八四年）。
- 22 『北海道新聞』一九八八年七月四日「テーマは初めて「反原発」／来月3日から平和美術展」。
- 23 『北海道新聞』一九八六年一〇月二八日「有意義だった「ばななぼう」と」。
- 24 『原爆の図丸木美術館ニュース』号外、一九八六年六月一五日。
- 25 『原爆の図丸木美術館ニュース』二二号、一九八六年七月七日。
- 26 『原爆の図丸木美術館ニュース』二五号、一九八七年一〇月一日。
- 27 『埼玉新聞』一九八七年一〇月二四日「故郷・北海道の原発操業に反対／東松山の画家・丸木俊さんが呼び掛け」。
- 28 知事夫人と面談した俊によれば、本当は原発には反対なのだが前知事が承認したことから止められないという「苦しい立場」を夫人は明かしたそうである（丸木俊「泊原発の炉心に火を入れるな」前掲『原爆の図丸木美術館ニュース』二五号）。
- 29 岩内原発問題研究会「泊原発の現状」、前掲『財団法人 原爆の図丸木美術館ニュース』二五号。
- 30 柏陽太郎『われら淋しき原住民——泊原発ゆいごん状』オフィス・イマジユ、一九九三年、一七四頁。なお、時期ははっきりしないが、俊が泊で原発建設工事のトラックを止めたというエピソードを披露しているのはこの時のことかもしれない（丸木俊「原爆の図」『原爆の図丸木美術館ニュース』三輪妙子・大沢統子編『原発をとめる女たち——ネットワークの現場から』社会思想社、一九九〇年、二七頁）。
- 31 八万人とは、泊原発運転開始の是非を問う道条例制定を求める直接請求に必要な数をさす。当時の北海道の有権者数は四百万人強で、

直接請求はその五〇分の一で起こすことができる（清水晶子「北海道発、脱原発メッセージ」前掲三輪・大沢編『原発をとめる女たち』、一二二頁。その後運動は拡大し百万人を超す署名を集めたものの、条例案は道議会で否決された）。

32 『北海道新聞』一九八七年一月二日「泊原発は必要ない 丸木さんの反核絵はがき 道内外から200通横路知事へ続々」。

33 松下竜一「私は女たちについていく」『原爆の凶丸木美術館ニュース』二六号、一九八八年三月七日。

34 『原爆の凶丸木美術館ニュース』二八号、一九八八年七月一日。

35 北村肇「泊原発反対運動の報告①機動隊員の涙に勝利を見た」『技術と人間』一七巻一〇号、一九八八年一〇月。

36 村上ひさ子「泊原発反対運動の報告②心打つ運動をめざし」『技術と人間』一七巻一〇号、一九八八年一〇月。なお、村上ひさ子はその後養子（丸木ひさ子）になる。

37 『北海道新聞』一九八八年八月二九日「絵画で訴える脱原発／丸木夫妻 チャリティー作品展」、『北海道新聞』一九八八年九月四日「丸木夫妻招き脱原発の集い」。

38 『北海道新聞』一九八八年一〇月一三日「丸木俊さんは抗議電報」。

39 大嶋薫「豊かに広がる可能性に向けて」広瀬隆編『原発がとまった日——1億2000万人のための脱原発読本』ダイヤモンド社、一九八九年。

40 電気代の銀行自動振り込みをやめるとするのは、電気料金不払い運動の最初のステップである。集金人が自宅を訪れることが意思表示の機会となる（斉藤美智子「都市の片隅から——電力会社とわたりあう法」前掲反原発事典編集委員会編『反原発事典Ⅱ「反」原子

力文明・篇』、二九二—二九三頁）。

41 『埼玉新聞』一九八九年四月二八日「原発分の料金払えぬ／東松山の丸木夫妻 東電は区別つかぬと困惑」、『朝日新聞』一九八九年二月一日「原発稼働分の料金支払い拒み、送電止められ7カ月 「原爆の凶」の丸木美術館／太陽と風の発電計画進む」。

42 丸木俊「原発止めないと原発に殺される」『原爆の凶丸木美術館ニュース』三二号、一九八九年四月二〇日。「東電さん電気を止めずに原発止めて」「原発止めないと原発に殺される（2）」『原爆の凶丸木美術館ニュース』号外、一九八九年六月二〇日。「原発止めないと原発に殺される（3）」『原爆の凶丸木美術館ニュース』三三号、一九八九年七月二八日。

43 前掲『原爆の凶丸木美術館ニュース』号外。

44 『埼玉新聞』一九八九年二月二〇日「'89この人 画家・丸木位里、俊夫妻 原発料金を不払い運動」。

45 『埼玉新聞』一九八九年二月四日「反原発の丸木美術館に風力発電を／浦和で市民集会」。

46 小寺隆幸「四月から公益財団法人に移行しました。そして脱原発のために太陽光発電を復活させます！」『原爆の凶丸木美術館ニュース』一〇九号、二〇一二年四月一〇日。

47 丸木位里「原発」『原爆の凶丸木美術館ニュース』三五号、一九九〇年三月一四日。

48 私は絵の実物をまだ見ておらず、ニュースレター（三五号）に掲載された画像しか知らないのですが、このような書き方をしている。なおどの原発をモデルにしているのか不明であるが、形からして日本国内の原発ではなく、外国のもののように見える。

49 前掲丸木俊「原発のエネルギーはいりません」三二頁。
50 柳原彰一郎「いま一度、原発について考えよう」『N O D E』一号、一九九七年。

51 『H A I R O ニュース』六号、泊原発の廃炉をめざす会、二〇一三年二月一〇日。

52 北海道新聞ウェブサイト「原爆の凶」に反核誓う 札幌でパネル展(2011/8/8)「原爆の悲惨さを描いた「原爆の凶」のパネル展が、札幌市北区北8西3の札幌エルプラザで始まった。市民有志がつくる実行委の主催で、平和と核について考える札幌市内のイベント「ピースデイズ2011」の一環。「原爆の凶」は、空知管内秩父別町出身の画家丸木俊さんと、位里さん夫妻が広島原爆投下後に被爆者救援に当たった体験を基に描いた大作で、今回は埼玉県丸木美術館に所蔵されている作品を複製した写真パネル15点を展示。入場無料、13日まで。」

<http://www.hokkaido-np.co.jp/cont/video/?c=event&v=1098375907001>
(二〇一五年九月二三日最終アクセス)

53 ピースデイズ2011ウェブサイト「核廃絶への運動が盛り上がった1982年夏」。ご夫妻を札幌へお招きして7月20日から6日間「原爆の凶」原画展が札幌市民ギャラリーで開かれ、延べ17,000人が入場しました。だが、いまその記憶も薄れてきています。「自分たちには子どもがいらないから、この絵が孫の世代への遺言」という思いも、残念ながら若い世代へ十分に語り伝えられていません。

1982年開催から29年目の夏、あらためて「原爆の凶」パネル展(丸木美術館所蔵)を企画いたしました。

「3・11」の大震災、福島原発巨大事故が起きた今、わたしたち一人ひとりの生き方が問われています。原発から放出された放射性物質が着実にわたしたちの生活を脅かし、子どもたちの体をじわじわと侵し始めています。この現実を目をそむけずに直視し、そして、語り合いましょ。未来に向けて。」

<http://peacedays.web.fc2.com/> (二〇一五年九月二三日最終アクセス)